

## 追悼

### 浅野 英氏を悼んで

(株)日本都市計画学会名誉会員 石川 充

浅野英さんは、昨年9月1日逝去された。他界されてからやがて半年。

終戦後内務省が解体するまで、地方の都市計画の主任技師達は縣庁と共に別官制の内務省都市計画地方委員会技師の肩書を併せ持っておられた。この人達が戦災復興の都市計画を先頭立って推進された。

やがてこの人達は内務省、戦災復興院、建設省に入り、戦後都市計画を完成して行く。

こういった人達がここ十年、楠瀬正太郎さんから始まり、次から次へと亡くなった。浅野英さんがその殿である。

「降る雪や昭和も遠くなりにはけり」である。

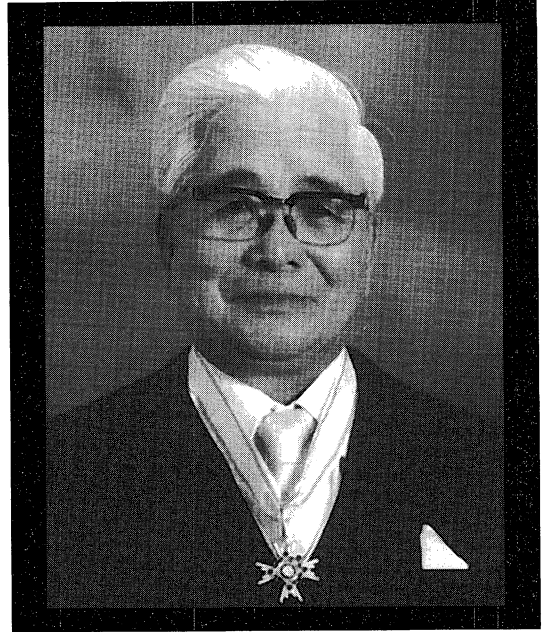
私が始めて浅野英さんにお会いしたのは昭和19年の春。

卒業論文の資料を貰いに神奈川県相模原土地区画整理事務所を訪れた時である。薄暗い大きな部屋の大きな机の前にロイド眼鏡の旧制高校の服装が似合いそうな小柄の紳士が坐っていた。

「いらっしゃい」と声をかけ近寄って来られ、「それで君幾日合宿出来るの」と聞かれた。「今日一日」と言う。「都市計画はそんな簡単にわかるものではないよ」と図面や資料を拡げながら説明された。帰り道の相模原は雲雀が嘯り、トロッコが走り、住宅営団が住宅を建てていた。相模原新興工業都市なる「ニュータウン」造りの所長さんをされていたのである。

浅野英さんは役人としてたえず五十嵐醇三さんの後を追って居られた。首都建設委員会第一課長の頃、事務局長は既に町田保さんから松井達夫先生に代っていた。

就任の日、私のところにこられ、浅野英さんは、「石川君、僕の名前はねえ、ほんとうは、「ハヤブサ」と呼ぶんだよと、うつむきかげんにテレながら話された。首都建時代には井上孝さんも居られたが東大の学生服姿の新谷洋二君（お二人とも後



故 浅野 英 氏

本会の名誉会員浅野 英氏には平成9年9月1日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

の東大教授)が、浅野さんの廻りをあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしていた。浅野さんはその頃、榎木寛之先生の後の東大の先生でもあったのである。

これは私事であるが丁度その頃、浅野さんは藤沢に住んでおられた。訪ねて行くと、立派な家で、「実はこの家は他の人の家で別荘番をしているのだよ」。それがご縁で義姉の家族と一夏辻堂に家を借りていただいた。よく訪ねて来られては「おい石川君、辻堂へ来いよ」と笑っておられた。

浅野さんの住宅公団時代は十余年に及ぶ。最初は創立期の昭和30年代。竹重さん、小西さんとのコンビ。ある団地で、「今日は測量へ入ろうとしたら汚物をまかれてしまって」と訪ねてこられた。理事の頃は筑波研学園都市。その関係で楠瀬正太郎さんを迎えられた。「僕は楠瀬さんに色々教えてもらっているの」と神奈川以来の盟友を迎えた。

都市計画学会を長岡で開催した時、専務理事で度々長岡を訪れられ、渡辺貴介助教授（現・東工大教授）大西隆教授（現・東大教授）と会われ、「石川がやると派手になるね」と笑っておられたとか。都市計画には不思議に旧制第二高等学校（仙台）の卒業生が多い。私の父栄耀、奥田教朝、浅野の両先輩、今野博君に到る。区画整理派と、街路派に別れ、各々の分野で活躍。

今ではあの世で、栄耀、奥田、浅野さんが「空は東北天高く……」「花より花に蜜を吸ふ……」と、寮歌を歌っておられるかも知れない。

英さんの墓碑銘は「戦后区画整理の道」。

御冥福をお祈り申し上げます。

---

## 花神の如き浅野 英先輩の業績

㈱日本都市計画学会名誉会員

渡部 与四郎

浅野英氏は東京大学土木工学科を昭和10年3月に卒業せられ、都市計画行政の中軸を歩まれ、日本都市計画学会の専務理事としても活躍された人格者である。常日頃から健康には留意され、平成9年9月1日81歳で逝去される前も、鎌倉の病院で治療され、回復されつつあるとの事であった。ここに、謹んで哀悼の意を表する次第である。

浅野さんは昭和25年6月から26年5月の間建設省都市復興課、34年6月から36年1月の間、区画整理課長として活躍されたのである。

私をはじめでお会いし、教示をうけたのは、浅野さんが経済安定本部に出向され、時々建設省都市局計画課に来られた折であった。当時、私は計画課土地利用係に配属され、本格的に総合都市計画を立案、樹立して、地方都市の復興をはかる仕事に従事していた。その中で、産業、人口の将来予測を附加価値率とか、回帰方程式とかで行なうことに没頭していた。そういう折、「渡部君」と呼ばれ「土木系である君は市街地構成をなす建築容積率と街路面積率との整合性についても勉強なさい」と言われた。この整合性は都市の健全性につながる基本であることは次第に判って来て、私の石川奨励賞、学会論文賞につながるきっかけをつくって下さったのである。

やがて昭和30年に日本住宅公団ができ、浅野さんは先買い、土地区画整理事業方式による新都市づくりの課長として、その事業計画の策定に携って居られた。当時東大の講師もやって居られ、この事業計画はマスタープランに基き、総合的に決めるべきとお考えの下、我々若手とともに現地調査をなされ、緑との共生にも留意された。例えば、新所沢の調査の折、雲雀が鳴いている緑豊かな林地を出来るだけ保全しながら、よい町をつくりたいものだと思われ、送電線の下を幅広い緑地帯にしようと言われたことを思い出す。

区画整理課長、住宅公団理事、国際開発コンサルタント社長を経て、丁度、私が学会の会長になった昭和60年には浅野さんは学会専務理事を務めて居られた。学会も30周年を迎え、会員も充実し、海外との交流も盛んになりつつあった時期であったので、事務局を強化するため桐英二さんを迎えたのである。これに呼応してか、浅野さんが退任を強く希望され、何か記念になるものはないかと話し合い、永年のお働きに対して論文賞同様のメダルを差上げた次第である。浅野さんは「すまんなあ」を連発され、童顔と慈父の顔色が交錯していた風情を思い出す。

御逝去の時、私は外国に行き寄り告別式等に参列できなかった。帰国してから早速、調布のお宅に参上しお焼香をした時、浅野夫人から浅野さんが叙勲を受けられ、勲三等瑞宝章とともにあるお写真を見せられた。実は、私も古稀となり秋の叙勲を頂戴したが、丁度浅野さんと同じものである。これらのことを思うと感無量の念になり、こみ上げてくるのを禁じ得ない心境になったのである。

昨年、3月私は中国の重心的位置にある武漢市を訪れ、黄鹤楼に登った。長江が望まれる楼には「気呑雲夢」の碑が樹っている。その意味する処は「夢を実現させる気力を持って」とのことであるが、私も揮毫を求められ「花神呑夢」と墨書した次第である。㈱日本都市計画学会の永遠性、つまり、都市計画の根據地として皆様頑張って下さることを、浅野英氏の霊とともにお願いしたいものである。